

瀬戸SOLAN小学校第1学年・学年通信



塩を抱き込み溶かし込む

SOLAN カフェにはお家の方々がたくさんの素敵なデザートをもってきてくれました。

クッキー、チョコレート、モナカ、パイにカステラ、おせんべいにラスク。

手作りのキッシュを作ってきてくださる方もおられました。

会が終わった後にも、美味しくいただきました。

ありがとうございます。



デザートに目がない私にとっては、まさに夢のような時間でした。

ちなみに私は、家でも新聞や書籍などの原稿を書く時はたいていスイーツをお供に仕事をしています。

洋のスイーツも和のスイーツも好きですが、特に好きなのは「お餅」を使ったデザートです。

味というより、その触感を求めているのかもしれませんが。

コンビニで買う時も、ついついモチモチした類のデザートを買うことが多

いです。

そういえばと思い返せば、私の小さい頃は、町内の人が集まって我が家でお餅つきをしたものです。

今ではほとんどの家庭に無いと思いますが、私の家には木の杵と臼がありました。

蒸らしたもち米を臼にドサッと入れ、杵でペタンペタンとついてお餅をつくのが月に一度の恒例行事でした。

できたてのお餅は本当においしくて、きな粉やら胡麻やらをつけて何個もほおばったものです。

年越しそばにも入れてもらったり、当然年始にはお雑煮を食べたり。

あとは、お汁粉にしてみらうこともありました。

あんこと一緒にぜんざいにする人もいるかもしれませんね。

ちなみに、あまーいぜんざいを作る時に、欠かせない調味料があります。

それが塩です。

私が10年以上愛読している雑誌「致知」には、こんな文章がありました。

ぜんざいをつくるのには砂糖がいる。

しかし、砂糖だけでは本当にうまいぜんざいは出来ない。

砂糖の逆の塩がいる。

塩はからいから駄目だと鍋の外に放りだしては、ぜんざいはできない。

塩を抱き込み溶かし込んだとき、初めてぜんざいは本物の味になる。

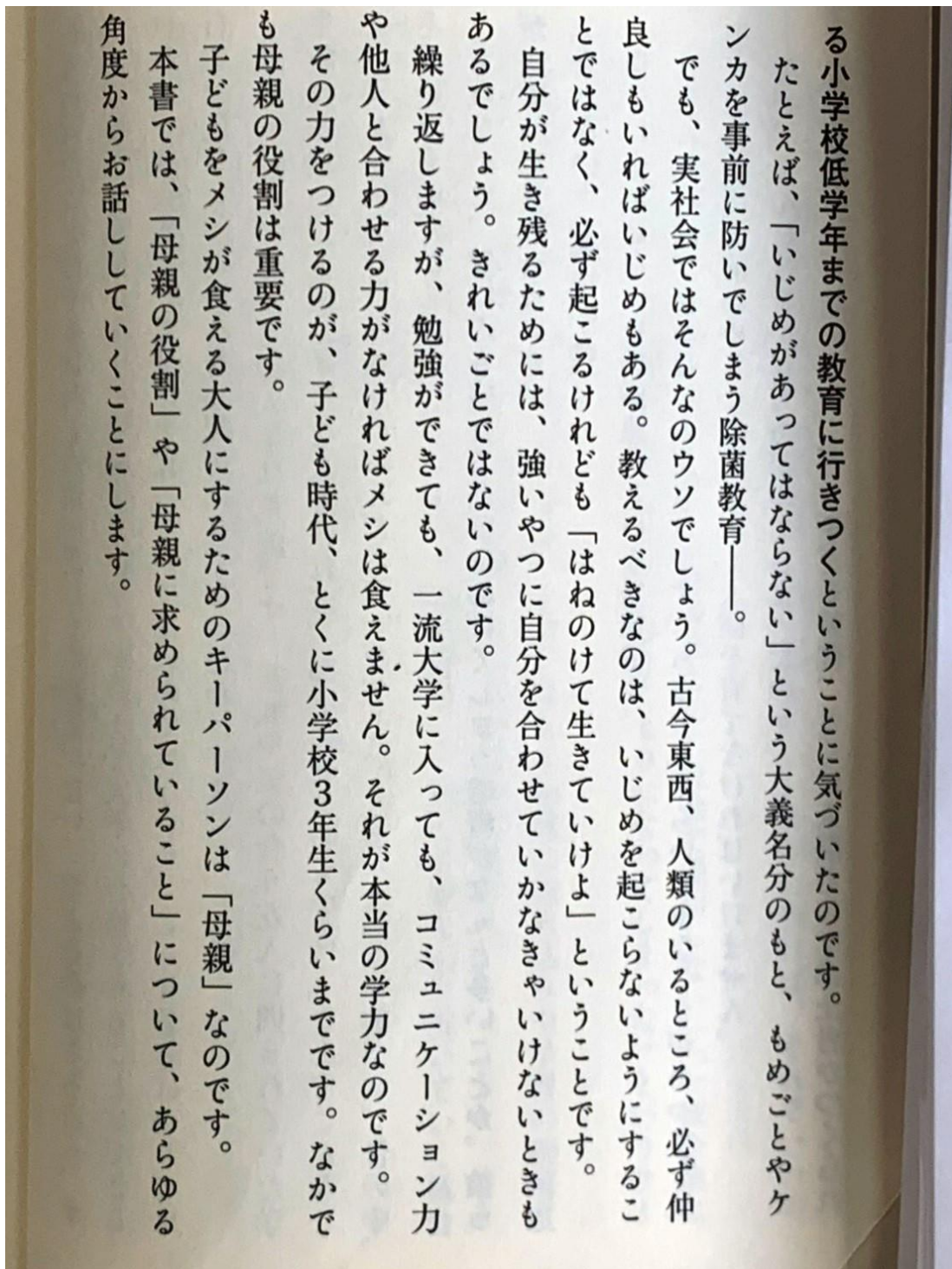
味の対比効果というのですが、対となる味、例えば甘味に対する塩味が同時に存在すると、甘みが引き立つのです。

スイカに塩をかけるのも、同じ原理からです。

これは、料理の話ですが、人生においても私は全く同じことがいえると思

っています。

例えば、日本の教育現場はありとあらゆるところが「除菌」されていると言います。ある本の一節を紹介します。

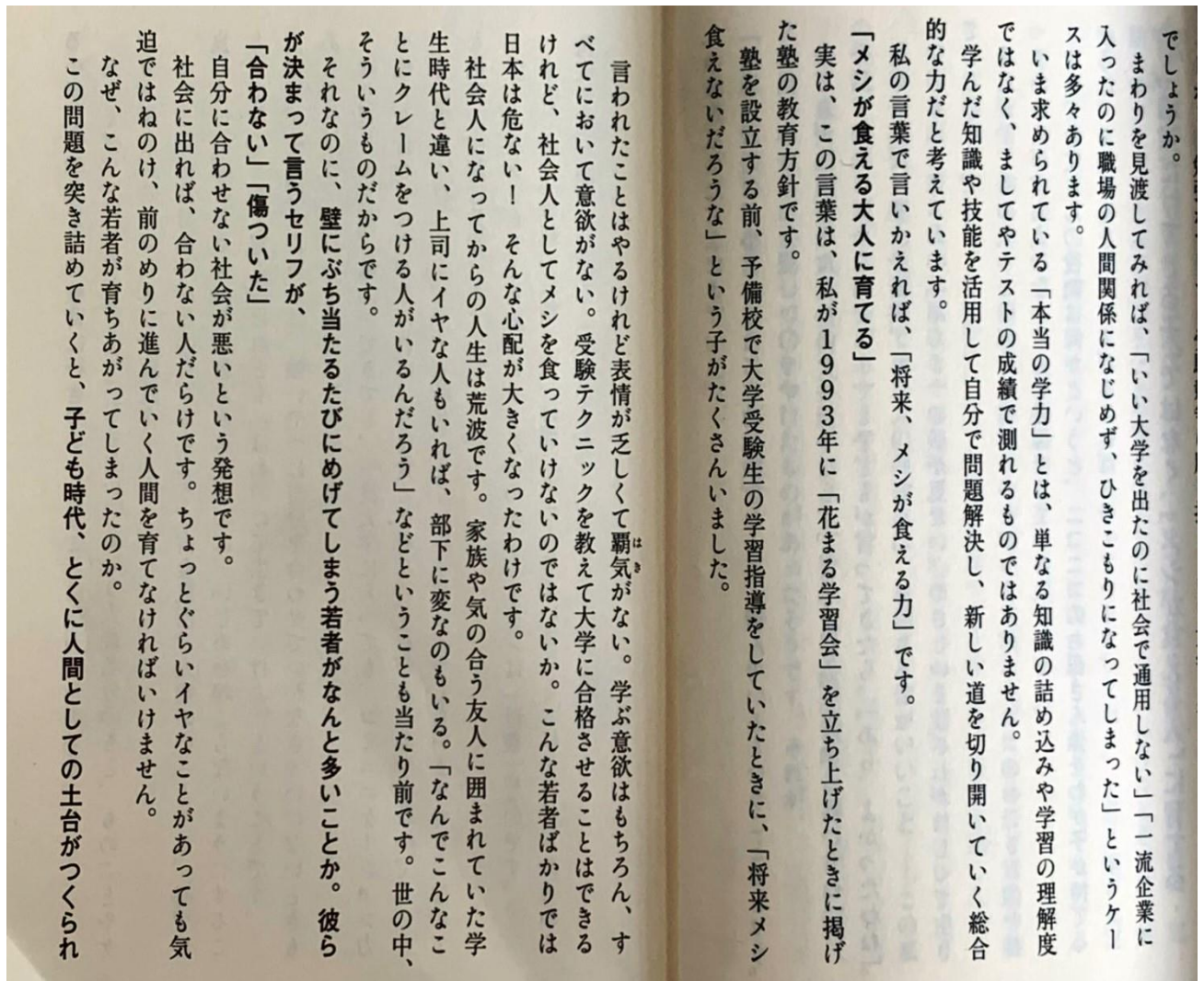


キーワードは、「無菌教育」「除菌教育」です。

そのまま、日本の教育事情の課題を表している言葉と言えます。

世界の様々な教育現場を見てきて、そう思います。

日本は、明らかに教育現場が除菌化・無菌化されています。



少しでもリスクのある遊具は、学校からことごとく撤去されました。

その中には、体育の教科を学ぶ上で必須となる基礎感覚や基礎技能を育ててくれるものが多分にあったにもかかわらず、です。

少しでもリスクのある取組は、ことごとく除外されました。

典型的なのは、学校で行う祭り行事の食べ物がそうです。

何かあったら困る。

何か起きたら責任を取らねばならない。

大多数の人が、「食べ物があった方がいい」と考えているにもかかわらず、そのGOサインが出せないのです。

昔は、そんなこと当たり前に行われていました。

以前の学校でも、食べ物をダイナミックに使って、様々なお祭りを行いました。

昔から、日本人は日常の事を「ケ」と呼び、祭りや行事ごとなどの非日常

を「ハレ」と呼んできました。

日常の「ケ」では、贅沢や遊びをつつしんで地道に働きました。

一方で、祭りや正月、節句といったハレの日には、ごちそうを食べたり賑やかにお祝いをしたりしました。

晴れ舞台、晴れ着などの「ハレ」という言葉はまさにそれです。

また、祭りのにぎやかさ、荒々しさもハレの日ならではのものです。

普段は秩序を乱さないようにしますが、ハレの日にはそこからはみ出すことが良いとされました。

「ハレ」と「ケ」。

大切に受け継いでいきたい日本の文化です。

しかし、除菌教育の中で、そうした取り組みは本来のよさをほとんど失ってきてしまっています。

学校現場からは、こうして諸々の「ダイナミックさ」がことごとく奪われてきました。

これは危ないからダメ。

あれも危険だからダメ。

ルールや規制は必要ですが、過度に取り締まることが、別の形でのリスクを生んでしまっていることを、教育現場はもっと知る必要があります。

除菌・無菌で育った先に、本来身に付くはずだった荒波とも呼べる環境で生き抜いていくために必要な力が得られなかったとしたら…。

その責任は、一体だれが取るのでしょうか。

人間関係の諍いやもめ事も、同じだと思います。

そのリスクを避け続けたことによって、本来は身に着けられるはずだった生き抜くための力を獲得できなかったとしたら…。

だからこそ、現代の学校や社会において、子どもたちが「失敗」という経験を確保していくことはとても大切です。

既に、大部分において過度な除菌化、無菌化が進んでいるからです。

それはつまり、出来ることばかりに挑戦するのではなく、あえて失敗や挫折を経験する場を意図的に作るということを意味します。

子どもたちが歩いている道の上に、そっと小石をいくつか置いておくようなイメージです。

柔道には、受け身の訓練があります。

登山には、滑落訓練があります。

学習も人間関係も、同じです。

これから先も多くの挫折を経験していく中で、「失敗の練習」をすることは欠くことができません。

整地された、石一つ転がっていない道を歩いていくことは、一見スムーズに見えるかもしれませんが、困難な局面に遭遇した時の対応力は、残念ながら育っていかないでしょう。

もちろん、この匙加減というかバランスは実に難しいものです。

そもそも乗り越えることが不可能なほどの大きな石を置くことは教育ではありませんし、かといって過度な除菌化も望ましくない。

つまり、乗り越えることが可能かどうかを見極めることが、我々大人に課せられた大切なタスクだといえるでしょう。

4 もめことはこやし、 学校はもまれに行くところ

いつの間にか、メディアを中心にケンカはいけないうちにされてしまいました。体罰をする先生がいれば、たちまち血祭りにあげられる。もちろん、本当に問題のある先生もいますが、もともと熱血漢で愛されている先生も多いのです。

私がここで言いたいのは、暴力を肯定することではありません。「ケンカ＝悪」という考えによって、いまの子どもたちになされている無菌教育についてです。

以前、私の塾にいたA君のエピソードです。

そのころ、私は授業の帰り際、5、6年生の子どもたちとよくプロレスごっこをしていました。A君もじっと見ていたので「入れば？」と声をかけると、「いいです、汚れますから」と言います。でも子どもたちは「きつとあいつも入りたんだろう」と抱きしめてワーツと仲間に入れました。

すると、A君は抱きしめた私の腕にツメを立てたのです。とっさに私は「この子はケンカをしたことがないんだな」と悟りました。幼稚園児ならともかく、これは問題だと思っただけは、その後すぐにA君のお母さんに電話をしました。

「この子は小さいころ、ケンカをしていないんじゃないですか？」と聞くと、「ええ、ケンカなんかさせません！」

お母さんはまるでいいことのおっしゃいます。

しかし、学校など集団生活の場というのは、子どもはもまれに行くのです。人間、もまれてナンボです。

オタマジャクシ時代の第一歩のもまれに耐えられなければ、カエル時代の厳しいもまれにも耐えられないでしょう。

もまれ体験、失敗体験を積み重ねてこないと、やがて大人になってもすぐに心がポキンと折れてしまう、社会人として通用しない人になってしまいます。

ですから、ケンカやもめごとを親が未然に防いでもってのほか。

子ども時代のもめことはこやし。喜びの経験がたくさんあってほしいのと同じように、どんだんもまれたほうがいいのです。

ここに書いてある通り、学校には本来「もまれる経験」というものが存在していました。

それはつまり、ぜんざいで言う所の「塩」に相当するものです。
甘く優しい経験だけでは、本物の味わいは出ません。
むしろ、思い出すだけで悔しさがこみ上げるようなほろ苦い経験があることで、人生にはぐっと深みが出ます。
そして、自分の感じる喜びや幸せが一層引き立つのだと思います。

ジャズシンガーの綾戸智恵さんという方は著書の中で、「大人になるとはどういう事？」の問いに、次のように答えています。

色々な種類の涙を知ること。

そして少しずつ優しくなること。

悲しい時に流す涙、悔しい時に流す涙、そして嬉しい時に流す涙。
いろんな種類の涙は、子どもたちを一步大人に近づけてくれることでしょう。



人生の「塩」に位置する経験を積むこと。
それを過度に除外したりせず乗り越えること。
これが、心の成熟には欠かせないと思っています。
いろんな経験を得ることで、喜びの深さや人生の幸福感は一層引き立って
いくことでしょう。

お餅の話・ぜんざいのお話から、今日はこんなことを考えました。

(文責：渡辺道治)

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](https://www.google.com)